九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

中国語初級教育における四つのアイデア ： 「是」述語文・前置詞句・諾否疑問文・完了相の教え方について

野田, 雄史
佐賀大学非常勤講師

https://doi.org/10.15017/19670

出版情報：中国文学論集. 39, pp.133-145, 2010-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

中国語初級教育における四つのアイデア

――「是」述語文・前置詞句・諾否疑問文・完了相の教え方について――

野田雄史

はじめに

筆者は既に、「中国語の音節構造の指導法について」（中国文学論集三十八　二〇〇九）・「入門期の中国語教育において発音再現はどの程度正確であることを要求すべきか」（未公刊）によって、入門期の中国語教育のうち、発音指導について考察した。今回は文法指導について考察したい。

文法は文の要であり、その習得には十分な手間をかけなければならないが、外国語学習における母語の干渉が避けられないものである以上、その手間というのは何を母語とするかによって異なるはずである。本稿では、日本人中国語学習者によく見られる誤謬の原因とその回避法を検討しながら、日本人にとってふさわしい教授法を検討する。[1]

1．「是」の誤過剰

日本人が中国語を学ぶ当初によく見られる間違いの例として「我是漂亮。」がある。中国語の形容詞述語文には「是」が不要であるにもかかわらず、誤って挿入してしまうのである。この「是」の誤過剰は英語の「I am beautiful.」に be 動詞があることの干渉で生じる、と認識する教科書が多く、「英語と違って中国語の形容詞述語文には「是」

はいらない」というような書き方がしばしばなされている。しかし一方で、「我是吃午飯。」というのも日本人の間違った中国語としてよく見かける。中国語の動詞述語文に「是」が不要であるのに対する誤過剰である。これに対応する英語「I eat lunch.」の中にはbe動詞はなく、「是」は英語の干渉によって出現することはできない。だとすると、形容詞述語文の場合もやはり英語の干渉とは言えないのではないか。

実は、日本人の英語学習においても「I am eat lunch.」という誤謬がしばしば登場する。英語のSV（O）構造において、既にこの誤過剰は発生しているのだが、そうするとこの間違ったbe動詞は一体どこから現われたのだろうか？

英語学習の初期において、I, my, me, you, your, you… の人称代名詞の格変化とともに、I am, You are, He is, We are… のbe動詞の人称変化という、日本語にない特殊現象を教えるために人称代名詞にbe動詞を付けて徹底的に口ずさませるが、その結果主格人称代名詞の付加成分のように意識されて一般動詞文にbe動詞が出現しているとも考えられる。

しかし中国語にはそんな事情はないにもかかわらず、「我是」とやってしまうのは何故か。筆者は、「是」を「～は…だ。」と覚えてしまうところにも一因があると考える。日本語の判断文には動詞がないので、「是」を直訳するすべはない。そこで、「是」を「～は…だ。」と説明してしまいがちなのだが、学習者にこう教えてしまうと、逆に「～は」という日本語は全て「～是」となると思い込む。「逆もまた真」による誤謬である。[2] 外国語の単語を教える時には、単純に訳語で教えてよい場合と、むしろ訳語を与えない方がよい場合とがあり、「是」は後者なのである。[3]

では諸本はどのようにこの誤解を回避しているか、表1にまとめたので参照いただきたい。

そもそも、どんなに丁寧に教えても、まだ中国語の文法に慣れない段階ではついつい「是」＝「は」と思い込んでしまうのも無理からぬことである。丙・庚本のように、いっそ「是」を第一課で教えない、というのが根本的な回避方法である。「是」を知らない以上、「是」の誤過剰は起きようがないのだが、「是」を知らないまま「是」が入らない動詞述語文や形容詞述語文を作り続けていけば「是」を習った後もやはり「是」の誤過剰は起きにくくなる。[4]

では、「是」を第一課で教えないことによるメリットが、「是」＝「は」という誤解の回避だとして、何か教学上

のデメリットはあるだろうか？

私は初級の教科書採択において庚本に出会い、２００６年に実際に教室で使って以降、この出現順を詳細に検討して私家版にも取り入れた。四年間この順序で教えた結果、特にデメリットはなかったように思う。むしろ、もう一つの大きなメリットがあった。それは、判断文ではない動詞述語文を最初に学ぶことで、中国語文法の基本構造である三つの構造（主述構造・ＶＯ構造・修飾構造）のうち、主述構造のみを教えることができるという点である。[5]

判断文の場合「是」は必ず目的語を必要とするので、これを教える際、主述構造とＶＯ構造の両方を一度に教えなければならない。そして大抵、打ち消しの「不是」もともに教えるので、修飾構造も同時に教える必要がある。主述構造は日中同語順であるが、ＶＯ構造は日中で語順が逆になり、修飾構造は本来日中同語順なのに否定のマーカーの品詞が日中で異なるためマーカーの位置が日中で異なってしまう。[6]

このため、日本語と中国語は語順が違う、という印象が強くなってしまい、学習を円滑に進めるのに妨げとなる。「是」以外の動詞述語文を最初に教えれば、目的語を同時に教える必要がなくなるため、目的語を取らない動詞述語文を提示して日中同語順の主述構造のみを教え、両国語の語順の相似性を強く印象付けることができる。

具体的には、まず「我去。」を教える。これは「私は行く。」という日本語と全く同語順である。しかも、「私」に相当する名詞と「行く」に相当する動詞しかないため、「は」に相当する単語はないと理解できる。

次に「我一定去。」を教える。連用修飾語と被修飾語の位置関係が日本語と中国語とでは全く同じであると理解できる。（英語は異なる）　これで、前述の三つの基本構造のうち主述構造と修飾構造で日本語と中国語が同じになることが学習でき、両言語の基本的な同質性を感じることができる、という具合である。

殆どの学生がこれまで日本語と英語しか知らない。外国語といえば、英語みたいに日本語と全く文法が違うのだろう、と思い込んでいる学生も多いので、最初の時間にその思い込みを補強するような文を教えるより、むしろ全く日本語と同じ語順を強調して教える方が、全体的に日本語と語順の似る中国語を教えていく上では有利である。[7]

このことからも、判断文を最初に教えないことは大いにメリットのある教授法だと言えよう。

2．前置詞句の後置

前節では、英語に起因すると見る向きもある「是」の誤過剰について、実は英語の影響ではないことを明らかにしたが、本節では明らかに英語の影響で誤りが生じる「前置詞句の後置」の誤謬について検討したい。

言うまでもなく中国語の前置詞句は動詞を前置修飾する（例：「我給他交這本書。」）のが原則で、目的語がない場合は前置詞句が後置される（例：「我交給他。」）こともあるが、目的語がある場合後置させる（例：誤「我交這本書給他。」／正「我把這本書交給他。」）ことはできない。ところが、学習者に試験をしてみると、この誤謬は結構多い。

これは前置詞句が動詞に後置される英語の語順に影響されてのことだと思われるが、これについて諸書はどう対応しているか、次に表2を参照いただきたい。

多くの教科書で語順について言及されており、その点に関しては十分配慮されているようだが、一方で個別に語順を示されるのみで統一的な基準がないとしたら、記憶の負担が増すばかりである。その点、丁・戊本のように「修飾」という機能で一般化すると記憶負担の軽減に役立つ。また乙本は「修飾」という用語を持ち出さないかわりに、構文モデルを一般化して前置詞句を連動文第一動詞や副詞・助動詞と同列に論じており、暗記しなければならない構文を一つに絞るという工夫が見られる。

私家版では前置詞句を主に連用修飾語となると説明し、修飾構造は日中同語順のため前置詞句もそうである、と教えている。日文中訳・中文日訳ともにただ単語を置き換えるのみで翻訳作業が済むので、「外国語というものは語順が難しいものである」と思い込んでいる学生にとっては、簡単すぎて拍子抜けしているようにも見受けられる。

前置詞を教える際に絶対にやってはいけないことは英語を引き合いに出すことで、「英語と違う語順」という提示の仕方も、安易にやると危険である。それは、わざわざ「違う」と言っても意識する以上影響が出かねないからで、逆に英語を意識するメリットはなく、提示する意味がない。（前置詞句に限らず中国語の文法事項全般にわたって、英語を意識させるメリットのあるものは極めて少ない。）

3．「嗎」と「か」

本節及び次節では、日本語に起因する誤謬パターンについて検討する。日本語母語話者にとって日本語起因の誤謬は避け難い。どう回避すべきか。まず本節では中国語の文末語気助詞「嗎」に関する誤謬を取り上げる。

中国語の文末語気助詞「嗎」は諾否疑問の語気を表わす。従って、「他去。／他不去。」に対して「他去嗎？」と使う。この使い方は難しくなく、特に誤謬は出現しない。問題は、「他去。／她去。」に対して「誰去嗎？」としてしまうことである。

これはありがちな誤謬であり、原因もはっきりしている。日本語では、「彼は行く。／彼は行かない。」に対して「彼は行くか？」と問い、「彼が行く。／彼女が行く。」に対して「誰が行くか？」と問うからである。つまり、中国語の文末語気助詞「嗎」が諾否疑問文専用の助詞であり、従って疑問詞疑問文で用いられることがないのに対して、日本語の終助詞「か」は汎く疑問の語気を表わすため、諾否疑問文・疑問詞疑問文いずれにも使われるからである。

この誤謬の最も困る点は、「誰去嗎？」が非文とはならず、違う意味の文として成立してしまうところである。中国語としては「嗎」がある以上当然文全体の語気は諾否疑問となる。日本人の感覚としては、この「嗎」の諾否疑問文の語気と、「誰」の疑問詞疑問文の語気とが反撥し合うようにも思えるのだが、中国語の「誰」には「疑問」の他に「不定」の意味もあるため、諾否疑問文と調和することができるのである。中国語学習においては通常これを疑問詞としてのみ学習し、不定の意味を知らない学習者も多い。これもまた日中間の差異による陥穽と言えよう。それでは、これらの点について諸書の対応を見てみよう。表3を参照いただきたい。

見ての通り、乙本以外「諾否疑問文」という用語が提示されていない。しかし、疑問文には主なものが二種類あり、問い方・答え方から疑問詞疑問文と諾否疑問文とを明確に区別できないといけないのは言うまでもないこと（中学英語でもそのように教える）で、にもかかわらずこれをはっきり教えないのは手抜かりである。まして「嗎」を「か」と単純に結び付けて提示するのは誤解を生じかねず、問題である。諾否疑問文の何たるかを、術語の提示とともに詳説するのが堅実でかつ誤謬を減らす方法である。

そのためにも、教える順も疑問詞疑問文→諾否疑問文の方が望ましい。諾否疑問文を先に教えると、疑問詞疑問文を知らない状態で「嗎」に触れることとなり、「嗎」＝「か」と誤認する危険性が増す。疑問詞を先に教えることで、「嗎」のない疑問文の存在を知った上で「嗎」に触れることとなるため、そうした危険性は、なくなりはしないが確実に減る。

また、疑問詞疑問文を先に教えるメリットがもう一つある。それは、答えに「不」を用いる必要がない、ということである。「不」は重要な基礎語彙だが、扱いが難しく、教え方に工夫が必要である。できれば一般的な副詞を教えた後に触れたい。しかるに、諾否疑問文を教えるには、否定の応答の中にどうしても「不」が必要となる。疑問詞疑問文はこの必要がないので、早い段階で教えることができ、都合がよいのである。[8]

4．「了」と「た」

前節に引き続き、日本語に起因する誤謬パターンについて検討する。本節では中国語のアスペクト助詞「了」に関する誤謬を取り上げる。

「我去。」に対する日本語は「私は行く。」であり、「我去了。」に対する日本語は「私は行った。」である。このことから学習者は容易に「了」＝「た」と認識してしまう。「「了」→「た」」は基本的に真である。だが、「「た」→「了」」は常には真ではない。従って、「了」＝「た」と認識してしまうと困った誤謬が生じる。たとえば「＊我昨天在了他家裏。」といった具合である。この問題の原因は複雑であり、それ故回避も困難である。諸書はどう対応しているか、表4を参照いただきたい。

この問題のわかりにくさの原因は、日本人が日頃「アスペクト」としての「完了」と「時制」としての「過去」とを区別していないことによる。古語においては過去の助動詞「き・けり」と完了の助動詞「つ・ぬ・たり・り」が別個に存在したが、それらは必ずしも十分に区別して使用していたとは言えず、ために現代語では完了の助動詞「た」（「たり」の語形が変化したもの）のみに合流してしまった。このことから現代日本語では、完了していない過

去の事象をも完了の助動詞「た」を流用して記述しており、完了と過去とを整然と区別するよすがはどこにもないのである。

従って、完了の「了」の使い方を会得させるために、完了と過去の概念をまず理解させる工夫が必要なのであるが、検討した教科書ではその工夫は十分ではなかった。教科書以外の文法書ではどう対処しているのか、表4補足を参照いただきたい。[9]

子本が日本語との対比に触れていないのは、原本は中国語で中国人のために書かれており、特に日本語との対比を考慮する必要性がないからである。一方、丑・寅本は日本語で書かれた日本人向けの一般書であるので、日本語との対比にも触れている。また、アスペクトの概念もかなり詳しく説明してあり、中国語教師が学習するのに便利である。しかるに、これらの成果が現行の教科書に余り反映されていないのは何故か。恐らく、アスペクトの概念がやや難しいために、初学者に教えるのをためらった結果と思われるが、概念が難しいからこそ、丁寧に教えないと学習者は間違うのであり、説明を回避すべきではない。

おわりに

以上見てきたように、初級中国語教科書の文法教育には、

・中国語・日本語・英語のそれぞれの文法について十分顧慮されていない

（もっと言うと、十分に検討されないまま、英語は必要以上に言及され、日本語は等閑視されている。）

・必ずしも日本人に最適化されているわけではない

・難しい概念を避けようとする

という傾向がある。しかし、概念が難しいからといって説明を避けていたのでは理解のしようがない。また、説明にあたっては日本人に教えるのにふさわしい教え方への配慮が必要で、無用に英語にとらわれた説明をすべきではない。それらの点に注意してこそ、中国語文法への正しい理解が得られ、実用的技術が備わるというものである。

注

（1）本論文は二〇一〇年五月十六日熊本学園大学で開かれた九州中国学会大会で口頭発表したものを成文化したものである。会場の内外で質問・指摘を多数頂き大いに勉強になったことを感謝する。

（2）日本語は名詞の格を示すのに格助詞等を使うが、このシステムが体にしみついていることも誤謬を誘うように思う。

日本語では全ての格において助詞を必要とする。一方で英語や中国語においても、やはり殆どの格を前置詞等の「付属語」で示す。英語・中国語で「付属語」を伴わないのが主格・目的格の名詞である。このうち、目的語は動詞との位置が日本語の場合と異なるため、「付属語」が伴わない、という違いは意識されにくい。ひとり主語のみ（主題の副助詞「は」と主格助詞「が」）が、日中英全てで文頭の共通位置に来てかつ英語・中国語には「付属語」がないのである。日本人としては「は」や「が」に相当する「付属語」を付けたくなるのも道理であろう。

（3）前稿と同じく八種の教科書を比較材料として使用した。以下、それぞれ甲～辛の代号で例示する。

甲　朝日出版社『ドリル付　着実に学ぶ中国語　入門篇』　讃井唯允　朱継征　二〇〇三年
乙　朝日出版社『ストラクチャー　構造から学ぶ入門中国語』　阪口直樹　小池一郎　名和又介　楠原俊代　沈力　銭鴎　榎本泰子　二〇〇二年
丙　好文出版　『文法をとおして学ぶ中国語　Ｐｌｕｓ』　依藤醇　石田友美　桑野弘美　島田亜実　森山美紀子　二〇〇六年
丁　三修社　『新中国一星期　中国語初級テキスト』　羅奇祥　二〇〇一年
戊　中国書店　『実力中国語』　岩佐昌暲　荀春生　日下翠　西山猛　二〇〇〇年
己　白水社　『１冊めの中国語　講読クラス』　劉穎　喜多山幸子　松田かの子　二〇〇八年
庚　白帝社　『現代中国語入門』　彭国躍　松村文芳　徐峰　加藤宏紀　二〇〇五年
辛　朝日出版社『おさらいＣＤ－ＲＯＭ版　ぼくのせんせい　問答有用　対話で学ぶ中国語』

相原茂　郭雲輝

二〇〇九年

筆者はこのうち、甲～庚本の七種を教室で実際に使ったことがある。辛本については使った経験がないが、「中国語の音節構造の指導法について」において、所謂「アクハシ」法に言及する必要から取り上げたものであり、引き続き本稿でも検討対象とする。

この他に、随時私家版教科書についても言及しているが、その内容については“http://homepage3.nifty.com/lisai/cn/index.htm”で目次を公開しているので参照してほしい。

私家版　『２００９年度　初級中国語　教科書』　野田雄史　二〇〇九年

なお、この私家版については、改良を加えたものを市販している。（野田雄史『初級中国語』筑豊日中文化企画　二〇一〇年　ISBN978-4-9905068-0-3）合わせて参考にしていただければ幸いである。

（4）先の九州中国学会において、「丙本で教授したにもかかわらず、判断文を教えて以降は是の誤過剰が起きた」という教学例を示していただいた。丙本では他動詞が判断文の後に来ているせいかもしれない。あるいは判断文を教える際に特別の配慮が必要なのかもしれない。（たとえば、せっかく形容詞述語文を先に教えても判断文で「是＝be」と教えてしまうと元の黙阿弥である。）この点については今後も継続的に検討したい。また他に教学例があればご教示いただければ幸いである。

（5）なお、『文法講義――朱徳熙教授の中国語文法要説――』（朱徳熙著　杉村博文・木村英樹訳　白帝社　一九九五年）によれば、中国語の文の構造は「偏正構造・動目構造・動補構造・主述構造・連合構造・述連構造」（同書九頁～一五頁）であるとされている。（以降の個別解説である章立ての順はこれとことなり、「主述構造・動目構造・動補構造・偏正構造・連合構造・述連構造」である。）これら六つの構造のうち、「連合構造」は並列や等位接続等を、「述連構造」は連動文等を指し、いずれも同等の構造が並列に列挙されるもので、その他の構造とは趣を異にする。

また、「動補構造」は動詞と補語（結果補語・方向補語等）との結合を分類するものであるが、

1．補語を取るのは動詞だけとは限らず、形容詞や名詞の補語についても統一的に考察する必要があること。

2．補語はそれら動詞・形容詞・名詞の補足説明をする役割を持つが、その役割は前置修飾の修飾語に類似し、

補語＝後置修飾成分と考えるべきであること。

の理由から、「偏正構造」のバリエーション（語順は正反対だが）と整理すべきだと筆者は考える。

この整理を経て、かつ日本語としてわかりやすい用語を選んだのが、ここで言う「主述構造」「ＶＯ構造」「修飾構造」である。（それぞれ同書に言う「主述構造」「動目構造」「偏正構造」に当たる。）

（6）相原茂・石田知子・戸沼市子『Ｗｈｙ？にこたえるはじめての中国語の文法書』（同学社　一九九六年）では「否定の言葉も日本語は動詞の後だけど，中国語は英語のように動詞の前」（同書一八六ページ）と述べ、中国語は英語と語順が同じで、否定文も同様である、と説明しているが、具体的な例示がないためどんな英文のどんな構造に基づいてそう判断しているのか不明。恐らく「go」の否定が「don't go」となる類のことを言いたいと思われるが、「don't」は助動詞だから動詞の前に来ているのであって、分析すると助動詞「do」を否定のマーカー「not」（副詞）が後ろから修飾しているものである。（言うまでもないことだが、「don't」は「do not」の縮約形である。）be 動詞で考えるとわかりやすいが、「is」を否定する場合、「is not」のように動詞の後に否定のマーカー「not」（副詞）が来ており、中国語の否定のマーカーの出現箇所とは逆となっている。マーカーの位置だけを問題にするのならば、むしろ英語と日本語は同じ位置だと言えるが、この言い方が意味を持たないのは言うまでもあるまい。

（7）まして「中国語は日本語と語順が違うので注意するように」のような教え方は、動詞と目的語の位置関係の相違を過大評価し過ぎたミスリードと言ってよい。このことの補足として、以下に中国語と日本語と英語の基本的語順を対照する目的の例文を掲げた。語順理解を第一の目的としたため、中国語においてややバランスが悪くなってはいるが、一見して中国語と日本語が酷似し、英語は全くそれらとは異なることが理解できると思う。

［例文］

（日本語）

一九九七年三月三日朝、私は大学のクラブの友達とゆっくりと大学北門から大学の近くのバス停まで歩いた。

（中国語）

一九九七年三月三號早上，我跟大學俱樂部的朋友慢慢地從大學北門到大學附近的車站步行。

（英語）

I walked slowly from the north gate of the university, to the bus stop near the university, with a friend of the club of the university on the morning of the 3rd of March, 1997.

（8）私家版では以上のことを踏まえて、

疑問詞疑問文→一般の副詞→「不」→諾否疑問文

という順で言及している。

（9）文法書として本稿中に既に言及した二種に加えて、一般向けの文法書として広く使われているもう一種（後掲）を検討対象とした。それぞれ子・丑・寅の代号で示す。書誌データは次の通り。

子　白帝社　『文法講義――朱徳熙教授の中国語文法要説――』　朱徳熙著／杉村博文・木村英樹訳　一九九五年

丑　東方書店　『やさしくくわしい中国語文法の基礎』　守屋宏則　一九九五年

寅　同学社　『Ｗｈｙ？にこたえるはじめての中国語の文法書』　相原茂　石田知子　戸沼市子　一九九六年

表１	判断文 (*1)	形容詞 (*4)	出現順 (*6)
甲	× (*2)	(*5)	動・(判)・形
乙	×	×	判・形・動
丙	×	×	動Ａ・形・判・動Ｂ (*7)
丁	(*3)	×	判・動・形（同一課）
戊	×	×	判・形・動
己	×	(*5)	判・形・動
庚	×	×	動・形・判
辛	×	×	判・動・形

*1：判断文を教える際の「是」についての注意喚起
*2：判断文としての学習項目そのものがない
*3：“「是」は「…である」”と説明する
*4：形容詞述語文を教える際の「是」についての注意喚起
*5：“「是」を使わない”と説明する
*6：判断文・動詞述語文・形容詞述語文の出現順
*7：「動Ａ」は目的語を伴わない動詞述語文
　　「動Ｂ」は目的語を伴う動詞述語文

表２	前置詞と訳語	位置付け (*1)	語順についての言及
甲	訳語あり	×	英語と語順が違う
乙	訳語なし	(*2)	(*3)
丙	訳語あり	×	介詞句は動詞の前
丁	訳語あり	○	動詞や形容詞の前
戊	訳語なし	○	動詞や形容詞の前
己	訳語のみ	×	×
庚	訳語なし	×	中国語では述語の前
辛	訳語のみ	×	×

*1：前置詞句を連用修飾語と説明するか
*2：言葉による説明はないがモデルにより機能を暗示する
*3：構文をモデル化して連動文等と同じパターンとする

表３	出現順	嗎の説明	疑問詞疑問文での言及	不定用法への言及
甲	疑問→諾否	疑問の語気	嗎は使わない	×
乙	一括	諾否疑問文	×	×
丙	諾否→疑問	「か」	×	×
丁	諾否→疑問	疑問を表す	×	×
戊	諾否→疑問	疑問を表す	嗎を用いる必要はない	×
己	諾否→疑問	「か」	嗎をつけない	×
庚	疑問→諾否	「か」	×	○ (*1)
辛	諾否→疑問	「か」	×	×

*1：疑問詞の連用を例示

表４	「た」の提示(*1)	「了」の機能	「過去」(*2)	他の「過去」(*3)
甲	×	既発已然	○	○
乙	×	完了発生	×	×
丙	○	完成実現	×	×
丁	×	完了	×	×
戊	×	完了	×	×
己	○	完了	×	×
庚	×	完了	×	×
辛	×	完了	×	×

*1：「了」の訳語として直接「た」を提示するか
*2：「了」を「過去」ではないと説明するか
*3：「了」を使わない「過去」を例示するか

表４補足　文法書での「了」の説明	
子	「了」と印欧語の過去時制との違いに言及。アスペクトへの言及はないし、印欧語の完了表現への言及もない。
丑	アスペクトの項目を立て、その概念を詳しく説明している。また、日本語では「た」を使うが中国語で「了」を使ってはいけない例もページを割いて詳しく説明している。
寅	アスペクトの項目を立て、その概念を図解して説明している。また、時制と相関しないことについても簡単に触れているが、日本語の「た」を「過去」と誤解しているように見受けられ、日本語との対応も十分には説明していない。